

「イスラエル建国史」

8 ヘルツェルの苦闘

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

国家再建の夢

ホベベイ・ツィオンが、地味な労働で開拓地を作る控え目な実践運動であるのに対し、ヘルツェルの考えたのは国家再建をめざす大掛かりな政治運動であった。

しかし、イスラエルの地に国家を再建し、そこへユダヤ人が帰還すると一口に言っても、それは至難の大事業であった。イスラエルの地はオスマン帝国の領土の一部になっていて、そこに何百万もの人民を収容する居住地を確保するのは、並大抵のことではない。ユダヤ人同胞は世界各地に散在し、どの国に住んでいるかで、生活条件が異なる。ロシア、ポーランド、ルーマニアなどでは法的に差別され、周りの社会に迫害され、ポグロムが発生し物理的生存さえ危ういが、オランダやイギリスでは比較的リベラルな環境にある。土地の購入資金を集めるのも難しいが、その土地が生産性を持つようになるまでの時間と労力も大変である。1つ1つが気の遠くなるような話であった。

ウィーンのホテル

ヘルツェルは、運動を支援してくれる社会事業に熱心な資産家を求めて、ヨーロッパ各地を回った。

1895年6月2日、



テオドール・ヘルツェル

ヘルツェルはウィーンでヒルシュに会った。『ユダヤ人国家』を発表する9カ月前である。社会事業家として知られるヒルシュは、アリアンス(AIU)の教育機関に多額の金を寄付し、1891年にはウィーンに教育基金(ガリシア、ブコビナのユダヤ人貧民子弟の教育)、ニューヨークにユダヤ人移民支援基金を設け、やはり同じ年にユダヤ人入植協会(ICA)を発足させている。こちらは、アルゼンチンへの移住事業を中心とする。ヘルツェルは大いに期待して会いに行った。しかし具体的な成果は何もなく会見は終わった。そしてヒルシュは10カ月後に死んでしまった。

フランスでは、ヒルシュよりは期待が持てると考えて、ロスチャイルドに会って支援を求めた。まことにそっけない結果で、既述のように冷たくあしらわれてしまった。

ロンドンのゴールドスミッド

イギリスは世界一の超大国であり、そこに住むユダヤ人は社会的な重要性を強めつつあった。ヘルツェルは期待してそこへも足を運んだが、よい手応えは得られなかった。イギリスは建国史上1番かわりの深い国になるが、それは先の話である。

ロンドンにホベベイ・ツィオン協会が生まれたのは1884年。ロシア、ポーランド出身者が設立したもので、オ

デッサの中央委員会と直結していた。しかし、あまり活動していない。カトヴィッツ会議で設立が決まったモンテフィオル協会は1885年3月に発足し、「ユダヤ人の労力による父祖の聖地への入植」を決めた。しかし資金はなく、開拓希望者も確保できず、有名無実の協会であった。

1887年、ロシアからの移住者たちがホベベイ・ツィオンに同調する新組織カディマ協会(東方への意)を、ロンドンのホワイトチャペルに作った。



ロンドン、ホワイトチャペル地区

エレツイスラエルに関する講演、ユダヤ人問題の討論会などで、会は大いに盛りあがった。ユダヤ人社会の有力者も参加し、ロンドンのほかユダヤ人労働者が多く住むマンチェスターやグラスゴーなど7都市に、協会が生まれた。ホワイトチャペルで開催された1891年5月28日の総会には4000人が集まる盛況であった。しかし新聞種にはなつたが、エレツイスラエルへの移住、開拓にはつながらなかった。英政府に対する要請(ユダヤ人入植



バロン・ド・ヒルシュ

制限の緩和を、トルコ当局に働きかけてもらおうとした)も、全く回答なしの状態であった。

イギリスのホベベイ・ツィオンは、2人の人物が主導していた。1人は、フランス出身のエルク・ヘンリー・ド・アビグドル(1841-1895)。土木技術者でシリアとトランスヨルダンの鉄道建設を監督した人物である。あとひとりがインド出身のアルバート・エドワード・ウィリアムソン・ゴールドスミッド(1846-1903)。ボーア戦争時第6師団参謀長として従軍した軍人で、両親は同化ユダヤ人であったが、成人してユダヤ人としての意識に目覚め、シオニストになった。1892年に1年間の休暇をとり、アルゼンチンのユダヤ人入植事業に参加した経験もある。

正統派ユダヤ人からの抗議

ヘルツェルは1895年11月にロンドンを訪れ、ノルダウの紹介でまずイスラエル・ザングウィル(1864～1926)に会った。『Children of the Ghetto(ゲッソーの子供達)』(1892)、『Ghetto Tragedies(ゲッソーの悲劇)』(1893)などの著作で知られ、新進気鋭の作家であった。ド・アビグドルはその年の2月に死亡しており、ザングウィルの紹介で会ったゴールドスミッドは、気乗りしない態度で応じた。まるで雲をつかむようなヘルツェルの話に、辟易したのである。11月24日にヘルツェルは、初めて講演する機会に恵まれ、国家再建の話をした。司会はザングウィル、主催団体はマカベア協会、ゴールドスミッドの率いるホベベイ・ツィオンではなかった。そして、ゴールドスミッド本人も講演会に出席しなかった。話を聞いた人々は、ホベベイ・ツィオンの関係者を含め



イスラエル・ザングウィル



ナタン・ビルンバウム

半信半疑であった(ヘルツェルは翌年7月に再訪し、この時はイーストエンドの集会でユダヤ人貧民たちの支持を得た)。

ヘルツェルが頼りにした資産家の経済支援はなく、イギリスのユダヤ人社会の積極的サポートも得られず、正統派ユダヤ人社会からも冷たい態度で扱われた。偽メシアの再来と嘲る人もいた。

ヘルツェルは、政治運動の第一歩であるシオニスト kongress を、ミュンヘンで開催することに決めた。1897年3月7日、開催準備中の行動委員会が同地開催を発表した。ところが、プロテストラビナー(抗議ラビ、シオニズムに反対するラビたちを意味するヘルツェルの造語)が、異議を唱えたのである。

この抗議ラビは、正統派のラビたちが1884年に結成した組織で、正式名をドイツ・ラビ全体会議(Allgemeiner Rabbiner Verband in Deutschland)と称した。外部の敵すなわち反ユダヤ主義と戦うのが、活動目的の1つであったが、まず戦わなければならないのは、皮肉にも“内部”の敵であった。ベルリンに本部を置く全体会議は1897年7月6日付で声明を出し、人智によるユダヤ国家の再建はメシア信仰に反し、ユダヤ人は居住する国家に忠誠を誓わなければならない、と宣言した。

有能な同志たち

ヘルツェルは「意志あるところ道あり」を座右とし、反対があれば、それをエネルギーに変えていく意志の人であり熱情の人であった。さらにヘルツェルには、マックス・ノルダウやナタン・ビルン

バウム(1864～1937)という有能な同志がいた。

シオニズムという用語を作った人物は、このビルンバウムである。ウィーン大の学生時代、レオ・ピンスカーと同じ結論に到達、同化に反対して学生民族団体カディマを設立し、ホベベイ・ツィオンの思想宣伝を目的に定期刊行物『自力解放』(1890～1893)を編集・発行した。

ビルンバウムはヘルツェルに先行するシオニスト思想家であり、「既存の実践開拓指向組織とは対照的な民族政治運動」の組織化を考えた(1891年11月6日付書簡)。その運動の目的は、2年後に出した小冊子『ユダヤ人問題の解決法としての、民族の郷土における民族の復活』という表題に端的に要約されている。

ビルンバウムは、初期 kongress 時代、運動の組織化に貢献し、ウィーンのシオニスト本部を統括する責任者であった。彼の指揮下で招待状が作られ、左に嘆きの壁、右に種蒔く農夫の図柄を配した参加証も作られた。場所はバーゼルのシュタットカジノ(市営集会場)が確保され、準備が進んだ。いよいよ kongress の開催である。(ビルンバウムはその後次第に文化シオニズムに傾倒し、政治運動を中心とするヘルツェルと距離を置くようになった。ビルンバウムの文化シオニズムはイーディッシュ語を中心とする文化へ変容し、やがて正統派ユダヤ人の世界組織「アグダット・イスラエル」へのめりこんでいく。ビルンバウムのたどった人生の軌跡は、世俗主義をつらぬいたヘルツェルとは対照的であった)。

* 滝川義人氏による「イスラエル建国史」1～4は、『イスラエル・トゥデイ』(7月をもって休刊。1冊500円)4～7月号に、連載されています。購入ご希望の方は、お申し込みください。